浜風会会報
第42号

浜風会/入会募集中
毎月第1,3木曜日

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.42

2023.7.1

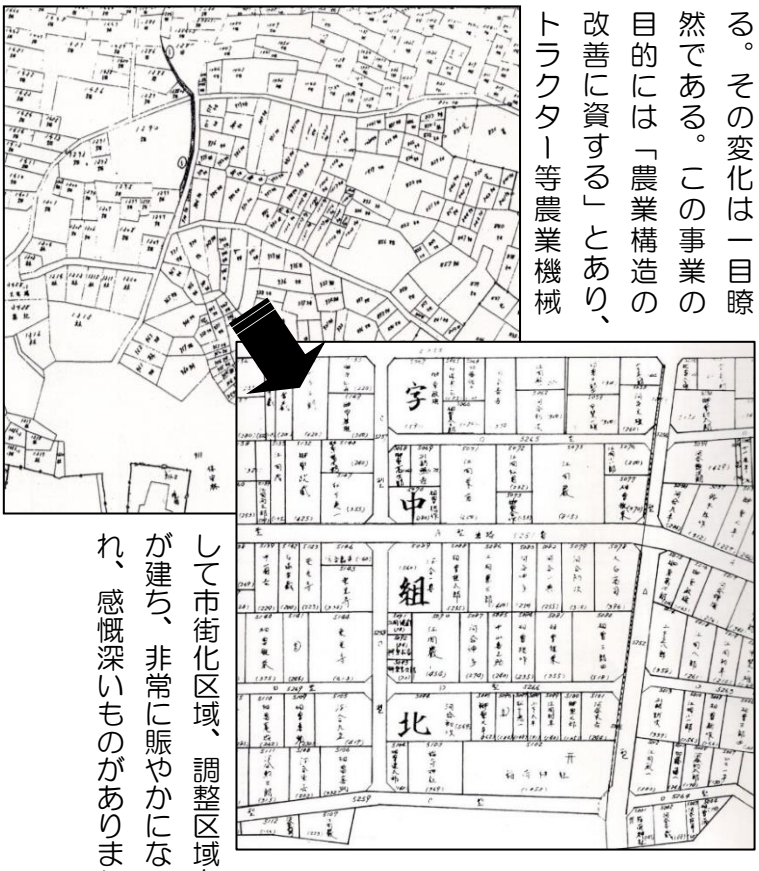
坪井馬郡土地改良区のこと

篠原の現在ある土地の形態を形作ったのは土地改良事業である。昭和34年に設立した「篠原村舞阪町南部土地改良区」と、続いて実施された「坪井馬郡土地改良区」である。

後者のことは平成16年に役割を終え、記念に発行『土地改良の記録』に詳述されているので、ここではその中から特に興味深い内容について引用する。

土地改良の成果（土地改良の意義）

左の図は土地の改良前後の地図である。その変化は一目瞭然である。この事業の目的には「農業構造の改善に資する」とあり、トラクター等農業機械が自由に使えるようになり農作業の効率は飛躍的に向上した。その上、道路が整備されたことにより、農地転用が容易になり、地域の発展に大きく寄与したと言える。



元理事長から振り返っての一言（一部抜粋）

「既に南部土地改良区が換地も殆ど済んでいた頃、裏も何とかせねばと盛り上がっていきました。そこで土地所有者で再三会合を開き、役員を決定するまで大変でしたが、市の指導を受け、何とか設立総会にこぎ着けたことを思い出します。それが昭和43年のことで事務所は如意寺本堂の隅に設け、市職員1名、事務職3名で始めました。当初は会合を2、3日に一回位開きましたが、大変だったのは事業も進み換地の了解を得ることでした。

事業も終わり、そして市街化区域、調整区域を問わず新しい家が建ち、非常に賑やかになって来たことに触れ、感慨深いものがありました」

（山下勝彦）

事業概要

実施期間	設立 昭和四十三年三月
	工事完了 昭和六十三年
	解散 平成十六年五月
総面積	約二〇〇ヘクタール
会員数	地権者 二五四名
総事業費	約一億四千五百万円

歴代理事長

初代理事長	刑部忠吉	馬郡町
二代理事長	刑部安四郎	馬郡町
三代理事長	藤田政司	馬郡町
四代理事長	竹村文男	馬郡町

記念碑のある如意寺前から富士見通りを臨む

河岸跡の調査

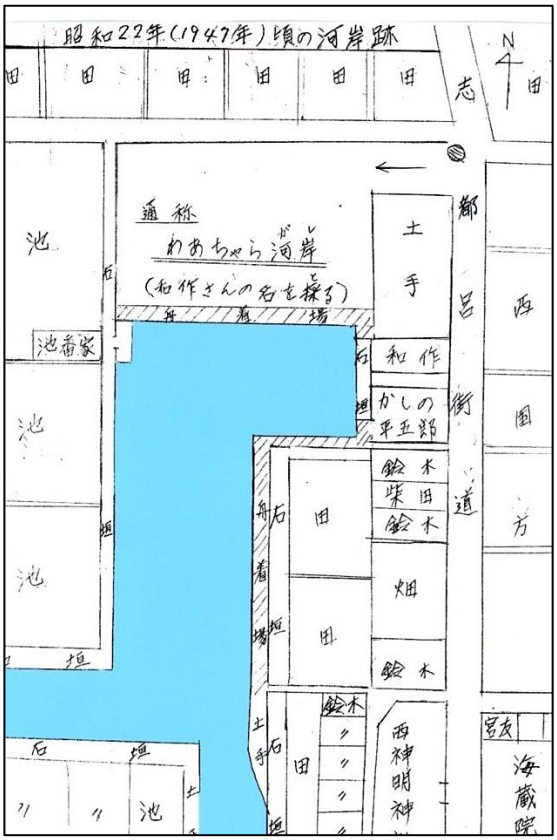
志都呂道の新幹線ガード下に愛称標識「河岸跡」が立っています。近くに住む者として、昔の河岸がどういうものなのか、どこにどのようにあったのか、しっかり知りたいと考え調べてみることにしました。河岸とは河川や湖の岸にできた舟着場のことです。中でもこの国方の河岸の特徴は集落に接していることです。ここを「わーちゃら河岸」と呼んでいたそうです。

愛称標識

先ず知っていそうな人に尋ねることから始めました。河岸のある国方に住むMさんに、かつての河岸の姿について話を聞くことができました。Mさんは終戦後、この河岸から父親の手伝いで舟に乗って「モク採り」に行ったことがありました。その経験から今でも当時の河岸の光景を微細な部分まで鮮明に覚えていて、河岸の図を描いてくれました。それが「昭和22年頃の河岸跡」の図です。（下図）

河岸跡の現在の様子

西神明神社の北西側にある細い道を西へ30ｍ程度歩きますと、かつての河岸が埋め立てられた場所に出ます。昭和の中頃まで存在していた河岸は東岸が舟の係留場所で北岸が荷揚げや荷下ろしがされる船着場になっています。歩いてみますと現在も河岸の構造自体は残っていることが分かります。昭和22年当時の河岸は養鰻池と養鰻池の間の東西の水路の東奥に、鍵形になって存在していたことが、Mさんの図解で分かりました。



浜名湖へ出て行く水路は今でも篠原川の水を流すために、新幹線の高架をくぐる構造で残っており、満ち潮の時は水を深くたたえていて今でも舟が浮かべられます。

現在の「とびうお大橋」の下辺り、湖が広く開けた所を、河岸の近隣の人達は「広っぱ」と呼びました。その広っぱから舟が水路を通って河岸まで来ました。東の岸辺は石垣になっていて、その水際に一ｍ程の人が通れる土手がありました。その岸辺には杭が何本も打たれていて舟の係留場所になっていました。現在石垣は崩れて埋もれていますが、当

見つかった石垣、左側が元水面

時の本物が残っています。ここに係留していた舟で浜名湖へ出ていき、角立漁やモク採り、ウナギツボ漁などを行いました。

河岸の北側の舟着場は、荷揚げ荷下ろしの場所で、トラックも入って来ることができました。モク（海藻）や魚貝などの荷をそこへ揚げると、舟は東側の石垣の所へ係留しておきました。

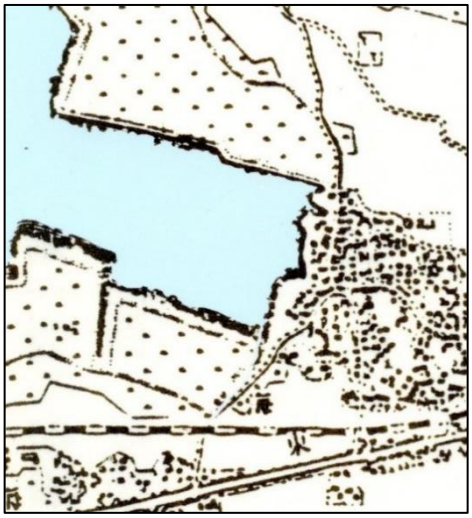
北岸の舟着場に、満潮の頃に限って団平船（ドンコ船）が着きました。団平船は焼玉エンジンで動き、幅が広くて底が平たい舟で、水深の浅い浜名湖の水運に適していました。他の小さな舟は干潮の時でも出入りできたが、団平船は大きく、人や物資をたくさん乗せたので、潮が満ちている時にしか河岸に入って来られませんでした。この河岸から村の多くの人々が団平船に乗って奥山半僧坊や、舘山寺、湖西の摩利支天などへ参詣や遊覧に出かけました。

ここで河岸近辺の光景の変化をMさんのお話から振り返ってみます。Mさんの図は昭和22年頃の河岸の様子で、既に河岸の周りは養魚場で囲まれ、その中央に残った水路で浜名湖へ出入していました。しかしMさん宅の先代が「養魚場を作る以前は、今の赤水門の辺りまで入江だった」と話されていたことを知り、実際に明治25年の地図を見ますと、この河岸が浜名湖の広大な入江の最奥部に位置し、河岸からは浜名湖の広々した景色を臨むことが出来ました。このように河岸の様子を大きく変えてしまったのは、時代の趨勢とは言え新幹線が通るようになり、浜名湖への航路、景観を完全に閉ざしてしまったことです。

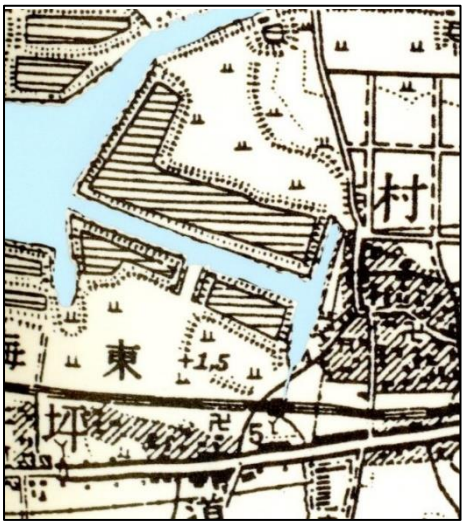
馬郡には権十エボが坪井には坪井エボが存在していたことも含めて、篠原村が浜名湖の水運と共に栄えてきた湖畔の村であった光景が偲ばれます。

今「河岸跡」の周辺は太陽光発電所の間を縫って、篠原川が防災を支える赤水門を経て浜名湖に静かに注いでいます。

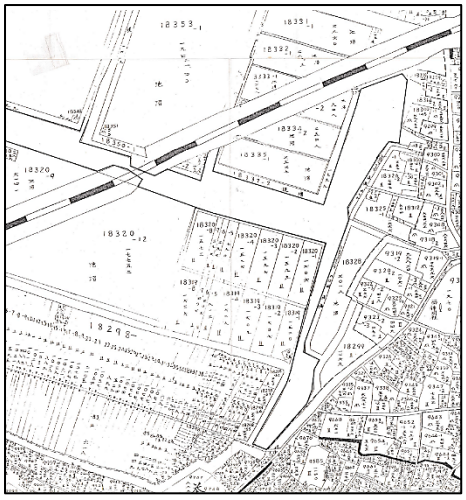
今回の調査でMさんの説明と案内により、在りし日の河岸の全体像が分かり、昔のまま埋もれた石垣を見つけることができました。後世に残したいものです。（鈴木坂江）



明治２５年地図



昭和３５年地図



篠原河岸周辺図昭和５４年地図

篠原川の浜名湖への直線部分

懐かしの弁当箱

物置を整理したら古い弁当箱がいくつも出てきた。アルマイト製でふたはベコベコとへこみがあるが、手に取って眺めていると小学校での昼食の様子が浮かび、それを追ってゆくといろいろ次々に出てきて、ふたをとった時の香りも感ずるような気がしてきた。記憶を辿ってみる。

朝ご飯の前に母はお釜から最初に弁当をつめて、それからおひつに移していた。お釜のご飯の上面には麦の層ができるのでしゃもじでよけて弁当には多く入らないようにする母の工夫であった。おかずは毎日決まって海苔で、皿にしょうゆを注ぎ、海苔を浸してからご飯の上に乗せる。これは子供が自分でやることだった。ふたをして新聞紙で包んだ。

周りの多くが海苔弁当だったのでこれが当たり前と思っていた。お昼の教室で食べる時、失敗から学んだ大事なことがある。ふたはさっと開けないことだ。ご飯の上の海苔がふたにくっついてしまうことが時々起こった。一旦ふたに付くと再びご飯の上に薄く広げることはできなくて、箸でかき寄せるしかなく、これをおかずにしてご飯と一緒に食べるとすぐになくなってしまい、それからはおかずなしで我慢して食べ続けることになる。

こうならないように、まずふたを少しだけ持ち上げて覗いてみて、海苔が持ち上がっていたら箸でつついてご飯の上に戻すのがテクニックだった。

お茶のやかんは前の席から回ってきて机の上に広げたふたについで後ろに送る。並々ついであるふたに口をそっとつけてまずはすする。手に持って飲むのは半分くらいになってからだ。こうすればこぼれない、みんなやっているのですする音がしたものだ。

海苔だけの弁当がいつまでだったか思い出せない。おかずをご飯の端の方に入れてくれたのは中学の頃だろうか。つゆがしみ出て包み紙が汚れ、教科書の端に茶色の染みが出来たのもこの頃だろう。かばんに顔を近づけるといつでもしょうゆの臭いがしたものだ。

高校に入って弁当箱は教科書と同じ大きさで少し薄いものになった。おかず入れは中に収められていて、パッキンとロックでふたはしっかり固定されるので大いに満足した。しかしいつの日かパッキンが伸び切って隙間ができ、また汁が漏れるようになった。かばんのしょうゆの臭いは高校まで続いた。

こうやって振り返ると懐かしくなって、海苔弁当を作ってみた。朝にご飯を詰めて海苔をのせてふたをして新聞紙で包んでおいた。昼に広げると海苔としょうゆの香りは昔のままだ。ふたにお茶をつぎ思い切り顔を近づけてすすったが、時代も変わりとても人前ではやれない、一度でやめにした。

自分が使ったであろう小さな弁当箱はすでになかったが、七十年も前の教室の風景を懐かしく思い出させてくれた。（鈴木忠）

海苔弁当とお茶

浜風会会報第４２号
篠原協働ｾﾝﾀｰ同好会「浜風会」
（篠原地区郷土の歴史を学ぶ会）
編集委員　委員長　山下勝彦
鈴木忠　鈴木理市
藤田博辞　山中道弘
発行責任者　山下勝彦
発行　令和５年７月１日